

小・中学校「適正規模・適正配置」の趣旨

これからの学校教育では、子どもたちの「生きる力」を育成することが求められています。このような教育を実現するために、有田町教育委員会および学校では、教育目標などを掲げ教育内容・教育活動および環境などの整備に取り組んでいます。しかし、現在我が国で進行している「少子化」は、教育目標を達成するうえで大きな影響を及ぼしており、「少子化に対応した活力ある学校づくり」が最も重要な課題の一つとなっています。

こうした課題に対応するために、この審議会では、有田町の子どもたちにとってよりよい教育環境のための適正規模・適正配置をどのようにしていけばよいのかについて検討します。

「適正規模・適正配置」の考え方

◎学校の適正規模

児童生徒が集団生活の中でお互いに切磋琢磨し、社会性を身に付けていくための生活環境のめやす（具体的には1校当たりの学級数）をいいます。法令の基準は次のとおりです。

・ 1校あたりの標準学級数 12学級～18学級

・ 1学級あたりの標準人数 40人

（小学校については、令和7年度までに段階的に35人に引き下げます）

※学校の規模については、6～11学級の学校は「小規模校」、12～18学級の学校は「標準規模校」、19学級以上の学校は「大規模校」となります。

◎学校の適正配置

適正規模を踏まえた学校の適正な配置をいいます。学校の位置や学区の決定などに当たっては、児童生徒の負担面や安全面などに配慮し、地域の実態を踏まえた適切な通学条件や通学手段が確保されるようにする必要があります。

有田町の現状と今後の見通しは？

1. 人口の減少と高齢化

町の人口は減少を続けており、20年後には1万5千人を下回るという推計が出ています。しかし、高齢者人口についてはそれほど変化がないため、高齢化率については拡大が続き、20年後には40%を超えるとみられています。（資料7）

2. 現在の学校別学年別の児童生徒数

令和5年5月1日現在の町内の学校別の児童生徒数は資料のとおりです。（資料8）

3. 児童生徒数の減少

令和8年、令和13年の将来の学齢人口の推移をみると、令和13年度の出生（0歳児）人口が100人未満となる予測がでています。

また、実際に平成26年から令和5年の出生（0歳児）人口の推移では、この10年で4割の出生児が減少しています。（資料9）

4. 小規模校の増加傾向

標準規模校（12～18学級）が減り、小規模校（6～11学級）が増えていきます。（資料8）

※平成27年に文部科学省が示した資料では「全学年でクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を超えた集団を作ったりするためには、1学年2学級以上あることが望ましい」とされています。

5. 中学校部活動数の減少

生徒数の減少に伴い部活動が成り立たない、顧問が確保できない等の理由で休部・廃部がでています。そのため生徒の部活動の選択肢が少ないことが課題です。また、入部したい部活動がなく居住地以外の中学校を希望する生徒がいます。（資料10）

6. 職員数の減少

学級数により決められている職員数の数は今後ますます減少し、特に中学校においては各教科担当の専門教員が配置されにくい状況になっていきます。

※平成27年に文部科学省が示した資料では「中学校で、すべての教科で教科担任による指導を行ったり、免許外指導をなくしたりするためには少なくとも9学級以上を確保することが望ましい」とされています。

7. 施設の老朽化

町内には築40年を過ぎている校舎が4校あり、西有田中学校が築63年、曲川小学校が築57年、大山小学校が築49年、有田中学校が築44年です。老朽化が進んでいて、できるだけ早く教育環境や衛生面の整備が必要な施設になっています。

（資料4） ※第1回審議会配布資料

少子化が教育環境に及ぼす課題とは？

1. 小規模学校経営上の課題

少人数集団になるほど、教育活動の活気・活性化が図られにくくなる。

2. 学級編成上の課題

学年によるが、1学年35人または40人未満は、1学級になりクラス替えができない。

3. 教職員配置上の課題

学級数に応じた教員配置となるため、特に中学校では専門教科担当職員が配置されない場合が出てくる。

4. 保護者の負担

P T A会員数の減少で、環境整備や学習活動への支援など、保護者1人あたりの負担が大きくなる。

5. 学習内容・活動上の課題

学習活動や内容が限定され多くの意見や考え方に触れる機会が少なくなり、多様な深い学びが難しくなる。

6. 個性伸長を図る上での課題

学級を超えたグループ学習や部活動の種類などに制約が生じ、児童生徒の能力や個性を伸ばすための指導が図られにくい。

7. 社会性の育成上の課題

人間関係の固定化したり、序列意識でそれぞれの役割を限定して考えたりする傾向になることがある。また、多くの仲間の中で切磋琢磨する場と機会が少ない。単学級ではよりよい集団づくりの活性化が図れない。

学校規模によるメリットとデメリット

○小規模校

※小学校は6～11学級、中学校は3～11学級の学校のことをいう。

	メリット	デメリット
学習面	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の1人ひとりに目が届きやすく、きめ細かな指導を行いやすい。 ・学校行事や部活動等において、児童・生徒1人ひとりに個別の活動機会を設定しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団の中で、多様な考え方に触れる機会や学びあいの機会、切磋琢磨する機会が少なくなりやすい。 ・1学年1学級の場合、学級間の相互啓発（ともに努力してより良い集団を目指す動き）がなされにくい。 ・運動会などの学校行事や音楽活動等の集団教育活動に制限が生じやすい。 ・児童・生徒数や教職員数が少ないため、グループ学習や習熟度別学習、小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態をとりにくい。 ・【中学校】部活動の設置が限定され、選択の幅が狭まりやすい。 ・【中学校】中学校の各教科の免許を持つ教員を配置しにくい。
生活面	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の1人ひとりに目が届きやすく、きめ細やかな指導が行いやすい。 ・児童・生徒相互の人間関係が深まりやすい。 ・異学年間の縦の交流が深まりやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス替えが困難なことなどから、人間関係や相互の評価等が固定化しやすい。 ・集団内の男女比に極端な偏りが生じやすくなる可能性がある。 ・組織的な体制が組みにくく、指導方法等に制約が生じやすい。 ・切磋琢磨する機会等が少なくなりやすい。
学校運営 (財政)面	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員間の意思疎通が図りやすく、相互の連携が密になりやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年別や教科別の教職員同士で、学習指導や生徒指導等についての相談・研究・協力・切磋琢磨等が起きにくい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・施設・設備の利用時間等の調整が行いやすい。 ・学校が一体となって活動しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員数が少ないため、経験、教科、特性などの面でバランスの取れた配置を行いにくい。 ・子ども1人あたりにかかる経費が大きくなりやすい。 ・教員の出張、研究等の調整が難しくなりやすい。 ・職員1人に複数の校務分掌が集中しやすい。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・災害発生等による緊急避難時に混雑が生じにくい。 ・保護者や地域社会との連携が図りやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・PTA活動等における保護者1人あたりの負担が大きくなりやすい。

○大規模校

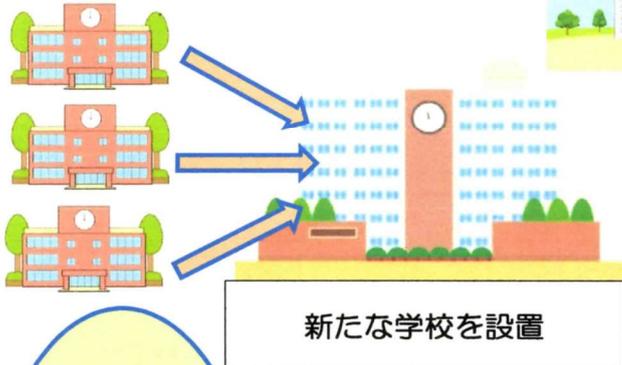
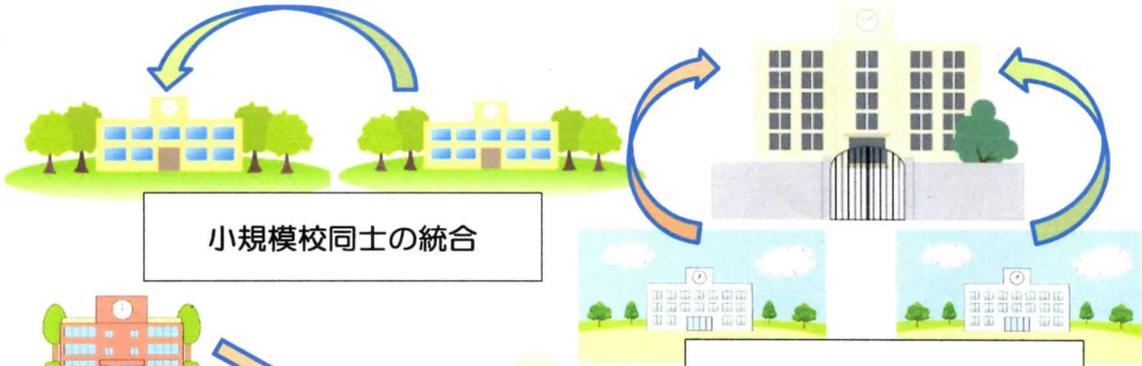
※小学校・中学校ともに19～30学級の学校のことをいう。

	メリット	デメリット
学習面	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒数、教職員数がある程度多いため、グループ学習や習熟度別学習、小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態をとりやすい。 ・集団の中で、多様な考え方に触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて、1人ひとりの資質や能力をさらに伸ばしやすい。 ・運動会などの学校行事や音楽活動等の集団教育活動に活気が生じやすい。 ・【中学校】様々な種類の部活動等の設置が可能となり、選択の幅が広がりやすい。 ・【中学校】各教科の免許を持つ教員を配置しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事や部活動等において、児童・生徒1人ひとりの個別の活動機会を設定しにくい。 ・全教職員による各児童・生徒1人ひとりの把握が難しくなりやすい。
生活面	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス替えがしやすいことなどから、豊かな人間関係の構築や多様な集団の形成が図られやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年内・異学年間の交流が不十分になりやすい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・切磋琢磨すること等を通じて、社会性や協調性、たくましさ等を育みやすい。 ・学校全体での組織的な指導体制が組みやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員による各児童・生徒1人ひとりの把握が難しくなりやすい。
学校運営 (財政) 面	<ul style="list-style-type: none"> ・学年別や教科別の教職員同士で、学習指導や生徒指導等についての相談・研究・協力・切磋琢磨等が行いやすい。 ・教職員がある程度多いため、経験、教科、特性などの面でバランスの取れた教職員配置を行いやすい。 ・子ども1人あたりにかかる経費が小さくなりやすい。 ・校務分掌を組織的に行いやすい。 ・教員が出張、研修等に参加しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別教室や体育館等の施設・整備の利用の面から、学校活動に一定の制約が生じる場合がある。 ・教職員相互の連絡調整が図りづらい。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・PTA活動等において、役割分担により、保護者の負担を分散しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・災害発生等による緊急避難時に、混雑が生じやすい。 ・保護者や地域社会との連携が難しくなりやすい。

出典：『公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引』
(平成27年文部科学省資料)

「適正規模・適正配置」を考えた場合の様々な「学校スタイル」

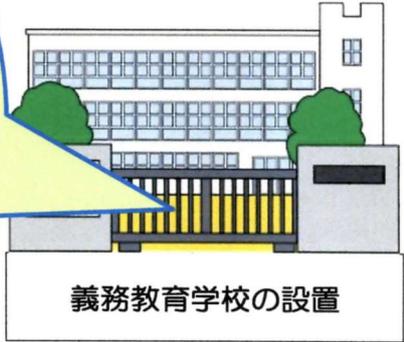


一貫した教育を行うため、小中学校を統合した「施設一体型」、小中学校を併設した「併設型」、学区内小中学校が協力して取組む「連携型」がある。
(あくまで小・中は別々)

自然豊かな環境に恵まれた小規模校に、離れた地域からでも入学可能な区域外通学を許可できる学校。特色ある教育を展開し、地元以外からも多くの児童・生徒を迎え入れ、運営していく学校。



義務教育を一貫して行う9年制の学校。カリキュラムのみならず学校行事や定期考査、部活動等、小学校から連続性のある指導を行うのが特徴。
(小・中の垣根がない。)
1年生～9年生が在学。



未来を担う子どもたちにとってよりよい

教育環境の実現を目指して！！

有田町の全小中学校を対象に検討します。

審議のときに重視していただきたいこと

① 子どもたちを主役に考える

教育環境をどのように整備し、持続的に維持していくのがよいのか、有田の子どもたちを主役に考えてください。

② 子育て世帯や当事者の意見を尊重する

保護者の方や、将来子どもを有田の学校に通わせる方とのコミュニケーションを重視し、その意向を尊重してください。

③ 地域の実情を考える

施設の実態、財政状況などを勘案し、中長期的な視点を踏まえて検討してください。

④ 将来を見据える

この審議会の決定が40年、50年先の有田町を形づくることを意識し、そこを見据えて審議・検討してください。